

祖父母による孫育て支援の実態と意識

— 祖父母にとっての孫育ての意味 —

主任研究員 北村 安樹子

目次

1. はじめに	16
2. 祖父母による孫育ての実態	18
3. 孫育てをめぐる祖父母の意識	20
4. まとめ	23

要旨

- ①全国の孫がいる55～74歳の男女1,000名を対象にアンケート調査を実施し、孫の世話や孫の親からの子育ての相談の実態とともに、祖父母が孫育ての支援をすることについての意識をたずねた。
- ②最も親しくしている孫について、孫の母親に頼まれて面倒をみた経験がある人は祖父で59.8%、祖母では73.0%を占めた。孫と同居する場合や30分未満の範囲に近居する祖父母では、経験者が8割を超えた。
- ③「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」という考え方にそう思うと答えた人は祖父母の約8割を占めた。このような考えをもつ人は、孫の面倒をみた経験をもつ人の8割近くを占めた。
- ④「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」という考え方にそう思うと答えた人は祖父母の約7割を占めた。このような考えをもつ人は、孫の面倒をみた経験をもつ人では8割前後、面倒をみた経験をもたない人でも6割前後を占めた。
- ⑤孫の親が祖父母に子育てを頼ることと、祖父母が孫育てを引き受けることをめぐって、祖父母の6割近くは「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」という複雑な意識を抱いている。ただし、若い祖父母には、孫の世話を許容する人も一定の割合を占めることが確認された。

キーワード：祖父母、孫、孫育て

1. はじめに

(1) 祖父母のライフデザインと孫育て

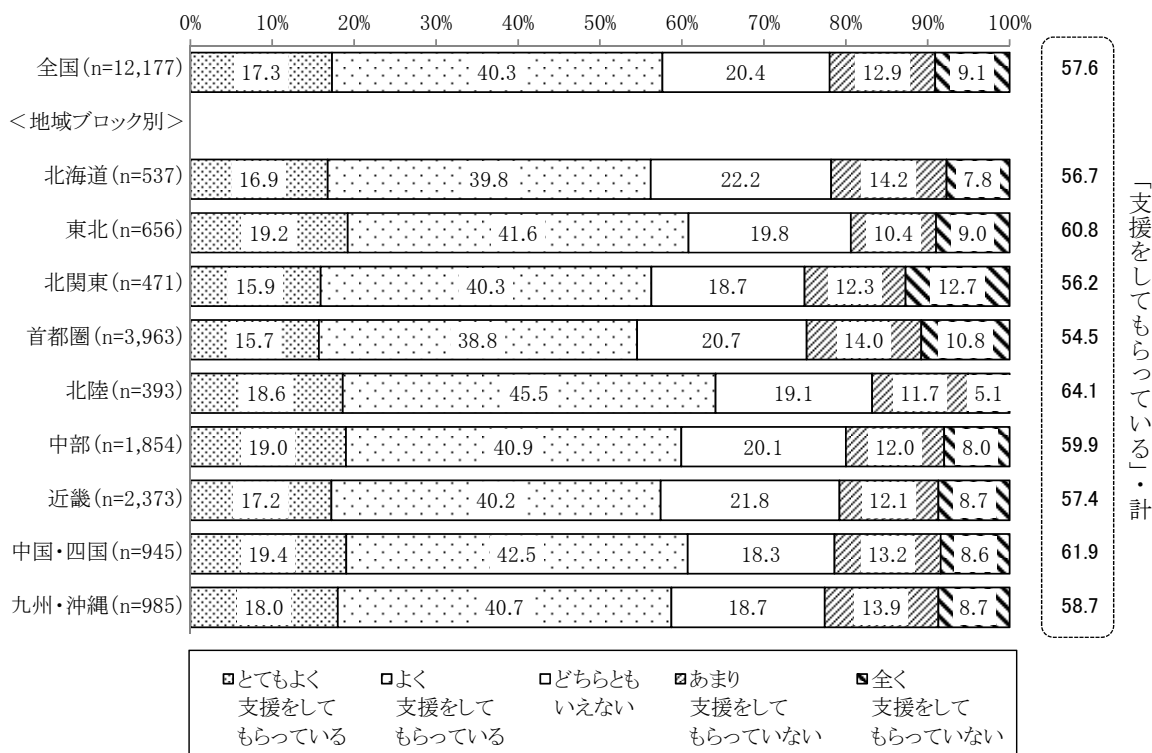
わが国の60歳以上の男女を対象とする内閣府の意識調査によると、老後における子どもや孫との望ましいつき合い方について、「いつも一緒に生活できるのがよい」と考える人は次第に減少し、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」と考える人が増えている（内閣府 2011）。以前は前者の関係を支持する人が最も多かったが、2000年代に入ってから後は者の関係を支持する人が上回るようになった。つまり、日本の高齢者が理想とする老後生活は、子どもや孫といつも一緒に生活する「密着型」から、親子双方がそれぞれのプライベートな時間・空間を確保した上で、ときどき会ってともに過ごす時間を楽しむ「交流型」に転換したと考えられる（北村 2014）。

このような価値観の変化には、次のような時代背景が関連していると思われる。第一に、時代の変化とともに、人々が現役時代から生活設計を行えば、老後の生活費や介護を子や孫に頼ることなく過ごせる世の中になってきたことである。第二は、これまで「高齢期」としてひとくくりに捉えられてきた60歳以降の人生が長くなり、医療・介護等が必要になる前の健康寿命期をできるだけ長く維持するために多様な活動をしたり、生活費を積み増すために働き続けたいと考える人が増えていることである。つまり、高齢者にとって、老後、子や孫とどのような距離感でつきあっていくのかは、長くなった高齢期の働き方や過ごし方をめぐる自身のライフデザインによって、多様なものに広がりつつある。

60歳以上の男女の意識にこのような大きな変化が生じている一方で、現在子育て中の親にとって祖父母は、依然子育ての重要なサポート資源として機能している実態がある。子どもがいる1万組以上の夫婦から回答を得た内閣府の調査によると、親からの子育て支援の度合いについて、母親では「とてもよく支援をしてもらっている」または「よく支援をもらっている」と答えた割合が57.3%であり、「全く支援をもらっていない」または「あまり支援をもらっていない」と答えた割合を大幅に上回る（図表1）。これらの実態には地域差もみられ、北陸が64.1%と最も高いが、最も低い首都圏でも54.5%と半数を超えている。

以上の背景をふまえ、当研究所では全国の孫がいる55～74歳の男女1,000名を対象に、祖父母による孫育て支援の実態を明らかにするためのアンケート調査を行った。この調査では祖父母から孫や孫の親への経済的支援の実態等についてもたずねており、これらの結果については北村（2015）にまとめている。一方、本稿では、祖父母による孫育ての実態のうち、孫の世話という物理的な支援のほか、孫の親の子育ての相談にのるといった精神的な支援の実態についてみる。また、親が孫育てを祖父母に頼ることや、祖父母が孫育てを引き受けることについての祖父母自身の考えについても明らかにする。

図表1 母親からみた祖父母からの子育て支援の度合い(全国、地域ブロック別)



注:内閣府『都市と地方における子育て環境に関する調査報告書』2014年3月より筆者作成。調査対象者は第1子が0～18歳で、妻が20～49歳の夫婦。調査時期は2011年11月17日～28日。調査方法は、インターネット・アンケート。夫側・妻側両方の両親が他界している人は除外。また、「支援をしてもらっている・計」は「とてもよく支援をしてもらっている」と「よく支援をしてもらっている」の合計割合。

(2) 調査概要

調査概要は図表2のとおりである。対象者は事前調査で孫がいると回答した人のなかから、性年代別にほぼ均等の数になるよう割付を行って計1,000名とした。ただし、55～59歳の男女については、事前調査において孫がいると答えた人が他の年代に比べて少なかったため、60～74歳の各年代に比べて回答者数が少なくなっている。

回答者の主な属性は図表3の通りである。回答者の平均年齢は65.1歳であり、平均で1人あたり2.5人の孫がいる(図表省略)。なお、初孫が生まれた時点の平均年齢を最年長の孫の学齢に基づいて推計したところ、男性が58.0歳、女性が56.0歳であった(図表省略)。

図表2 調査の概要

●調査対象	全国の孫がいる55～74歳の男女
●調査方法	インターネット調査(株式会社クロス・マーケティングのモニター)
●サンプル数	1,000名
●調査時期	2014年11月5日～7日

図表3 回答者の主な属性

		n	%			n	%	
性別	男性	500	50.0	孫の人数	1人	329	32.9	
	女性	500	50.0		2人	246	24.6	
年代	55-59歳	178	17.8		3人	166	16.6	
	60-64歳	275	27.5		4人	147	14.7	
	65-69歳	274	27.4		5人以上	112	11.2	
	70-74歳	273	27.3		最年長の孫の学齢	就園前	184	18.4
配偶状況	既婚(配偶者あり)	876	87.6			園児	170	17.0
	離別・死別(配偶者なし)	124	12.4			小学生	370	37.0
孫との同別居	同居	67	6.7			中高生	196	19.6
	別居	933	93.3			大学生以上	80	8.0

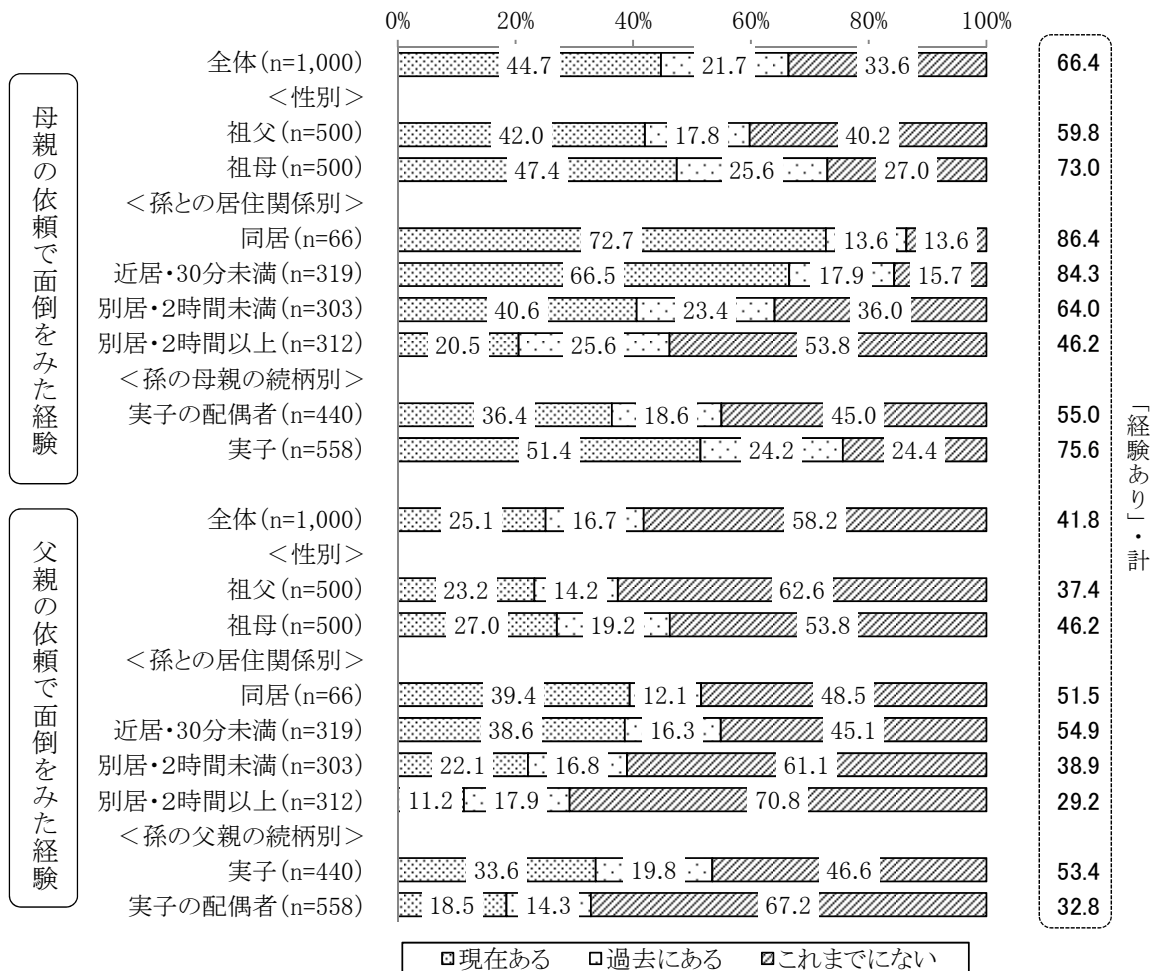
注:学齢が「大学生以上」には、「学校を卒業している」孫を含む

2. 祖父母による孫育ての実態

(1) 孫の面倒をみた経験

はじめに、祖父母による孫の世話の実態をみる(図表4)。

図表4 孫の親に頼まれて、孫の面倒をみた経験(性別、孫との居住関係別、孫の親の続柄別)



注:最も親しい孫についての回答

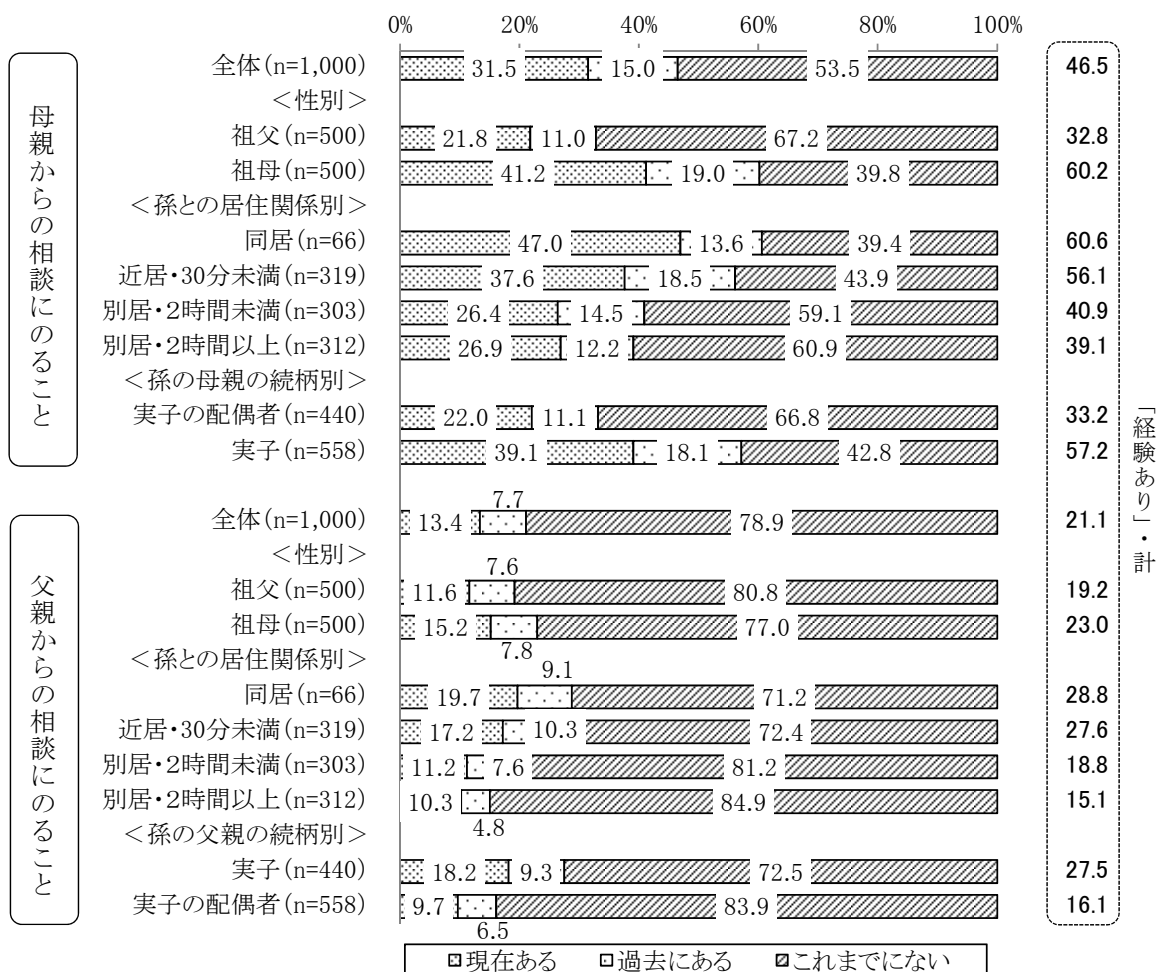
回答者のうち、孫の母親に頼まれて孫の面倒をみた経験がある人（「現在ある」「過去にある」の合計割合、以下同じ）は66.4%となっている。居住関係別にみた場合、同居や近居・30分未満の人では8割を超えるが、別居・2時間未満の人では6割強、別居・2時間以上の人では46.1%にとどまる。また、孫の親の続柄別にみると、母親が嫁の人（55.0%）より娘の人（75.6%）の方が、面倒をみた経験がある人の割合は大幅に高い。

これらの傾向は、孫の父親の依頼で面倒をみた経験に関してもおおむね共通する。ただし、父親の依頼で面倒をみた経験がある人は41.8%であり、母親の依頼に比べて20ポイント以上も少なかった。

(2) 孫の親からの子育ての相談にのった経験

次に、祖父母が、孫の親からの子育ての相談にのった経験についてみる（図表5）。

図表5 孫の親からの子育ての相談にのった経験（性別、孫との居住関係別、孫の親の続柄別）



注:最も親しい孫についての回答

回答者のうち、孫の母親からの子育ての相談にのった経験がある人は46.5%となっている。居住関係別にみた場合、同居や近居・30分未満の人では半数を超えるが、別居・2時間未満や別居・2時間以上の人では4割前後にとどまる。また、孫の親の続柄別にみると、母親が実子の配偶者の場合（33.2%）より実子の場合（57.2%）の方が、相談にのった経験をもつ人の割合が大幅に高い。

これらの傾向は、孫の父親に関するもおおむね共通するが、孫の父親からの子育ての相談にのった経験がある祖父母は21.1%と、孫の母親からの場合に比べて20ポイント以上低い。父親の場合、祖父母にとって最も親しい孫であっても、世話の面だけでなく相談の面でも、祖父母を頼りにすることは母親に比べて少ないことがうかがえる。

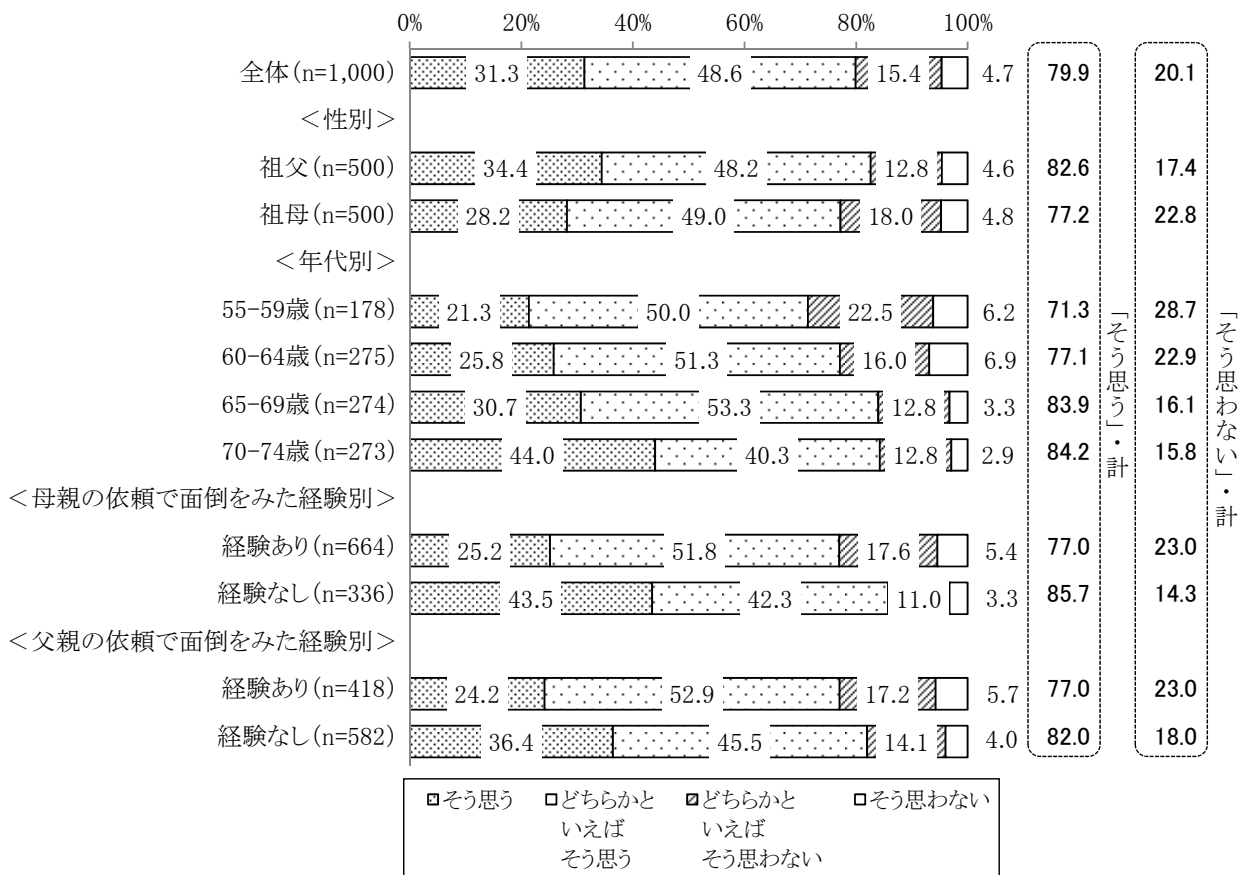
3. 子育てをめぐる祖父母の意識

(1) 子育てを祖父母に頼ることへの意識

次に、親が子育てを祖父母に頼ることや、祖父母が孫の世話を引き受けることについて、回答者がどのような考えをもっているのかをみる。

図表6は、「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」という考え方について

図表6 「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」(性別、年代別、孫の面倒をみた経験別)



てどう思うかをたずねた結果である。これをみると、そう思うと答えた人（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計、以下同じ）は79.9%を占め、祖父母の約8割が子育てを祖父母に頼らず、親自身で行うべきだとの考えをもっていることがわかる。

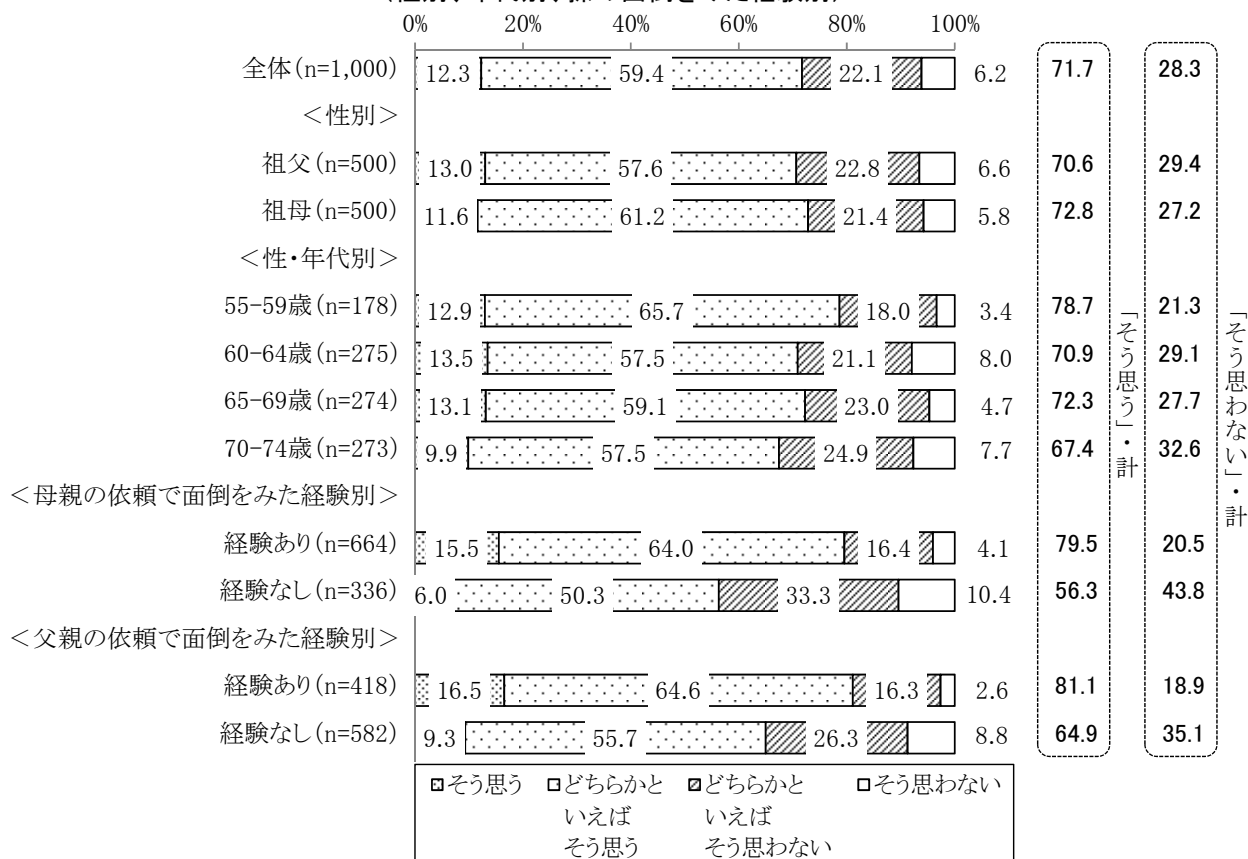
このような意識をもつ人は、祖母（77.2%）より祖父（82.6%）で、若い祖父母より年配の祖父母で多くなっている。また、実際に母親や父親の依頼で孫の面倒をみた経験をもつ祖父母の8割近くが、本来であれば、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだという考えをもっていることも確認された。

(2) 孫の世話を引き受けることへの意識

次に、祖父母が孫の世話を引き受けることについての意識をみる。

図表7は、「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」という考え方についての回答結果である。これをみると、そう思うと答えた人は71.7%であり、約7割の祖父母が、孫の世話は大変であっても、引き受けるべきだと考えていることがわかる。このような意識をもつ人は、年配の祖父母より若い祖父母で多くなっている。また、実際に母親や父親の依頼で孫の面倒をみた経験をもつ人の8割前後が、孫の世話は大変だが、引き受けるべきだという考えをもっていることも確認された。

図表7 「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」
(性別、年代別、孫の面倒をみた経験別)



(3) 孫育てをめぐる複雑な思い

では、回答者は孫の親が祖父母に子育てを頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けることの双方についてどのような考え方をもっているのだろうか。

図表8は、先にみた「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」という考え方への回答と、「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」という考え方への回答を組み合わせたものである。全体で最も多かったのは、双方の設問にそう思うと答えた「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」であり、54.3%を占めた。回答者の半数強は、

孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の子育てを引き受けることをめぐって、本来であれば、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだという考えを抱きながらも、一方では娘や息子のためには引き受けるべきだとする複雑な意識を抱いていることがわかる。

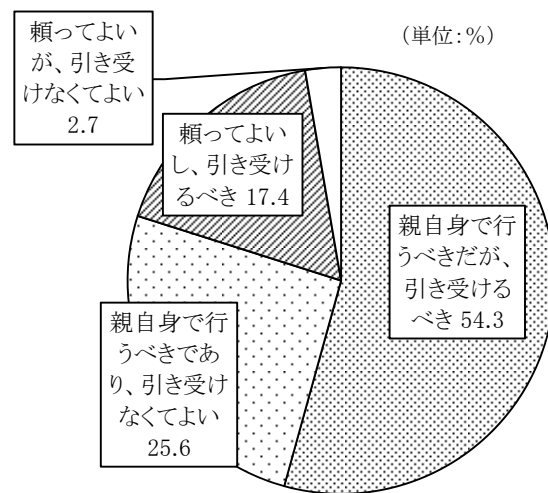
これに次いで多かったのは、前者の設問にはそう思う、後者の設問にはそう思わないと答えた「親自身で行うべきであり、引き受けなくてよい」であり、25.6%であった。これらの人々は祖父母を頼ることと祖父母が引き受けることの双方を許容しない立場の考えをもっている。なお、前者の設問にそう思わない、後者の設問にそう思うと答えた「頼ってよいし、引き受けるべき」という考えの人は17.4%であった。

ここで、祖父母が孫の世話を引き受ける場合の意識に注目するため、全体で最も多かった「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」と、頼ることと引き受けることの双方を許容する「頼ってよいし、引き受けるべき」と答えた人の割合を主な属性別に比較する(図表9)。

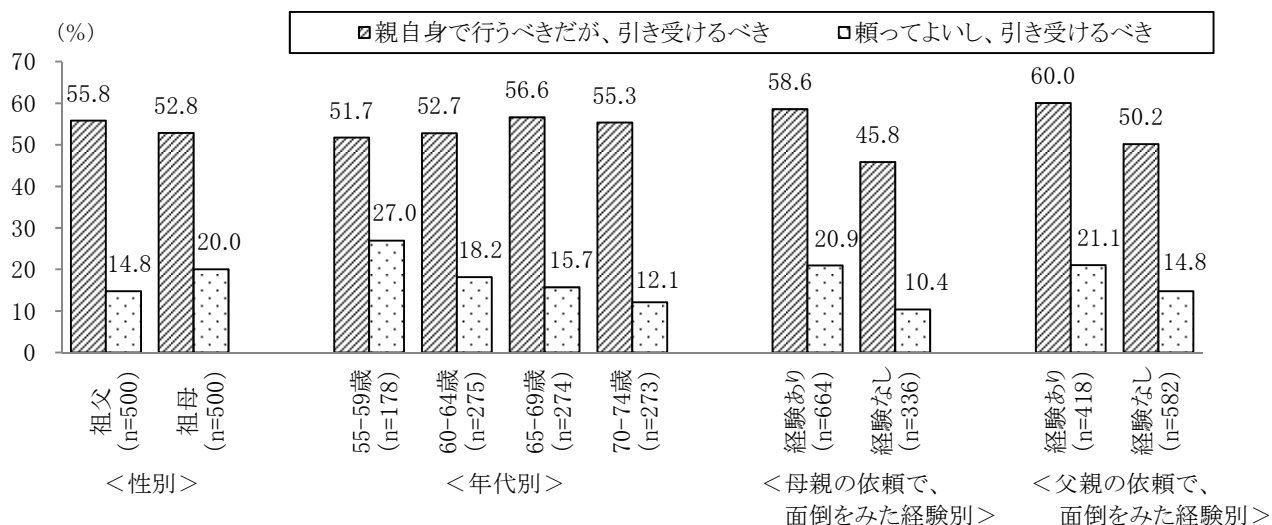
まず、「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」と答えた人は、性別、年代別、孫の面倒をみた経験別のいずれの比較においてもおおむね半数を超えている。実際に、孫の親の依頼で孫の世話を引き受けた経験をもつ祖父母においても、6割前後がこのような複雑な意識をもっていることがわかる。

一方、「頼ってよいし、引き受けるべき」と答えた人は、年配の祖父母より若い祖父母が多く、55-59歳では27.0%を占める。この割合は、「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」と答えた人に比べれば20ポイント以上も低い。しかし、若い祖父母のなかには、孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の子育てを引き受けることの双方を許容する立場の考えをもつ人が一定の割合を占めることが確認された。

図表8 孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けることについての考え方(全体)



図表9 「親自身で行うべきだが、引き受けるべき」「頼ってよいし、引き受けるべき」と答えた人の割合(性別、年代別、孫の面倒をみた経験別)



4. まとめ

(1) 親の子育て支援者としての祖父母

今回の調査の結果、祖母の7割以上が孫の母親の依頼で孫の世話をした経験を、祖母の約6割が孫の母親の子育ての相談にのった経験をもっていることが確認された。なかでも祖母は、孫の世話といった側面だけでなく、子育ての相談相手という精神的な側面でも孫の親の重要な支援者となっている実態が確認された。祖母と孫世帯が距離的に離れて住んでいる場合に比べて、近い範囲に住んでいる場合には、このような傾向が特に顕著にみられた。

冒頭で紹介した内閣府の調査では、子どもの世話をしてくれる人や子育ての相談相手が多い人ほど親は子育てをしやすと感じていることが示されている。今回の調査では子育てをめぐる祖父母以外の支援資源の実態をたずねてはいないが、支援の選択肢の中で祖父母がどのような位置づけにあるのかは興味深い。たとえば今回の調査において、祖父母が最も親しくしている孫の場合であっても、父親の依頼で祖父母が孫の世話をしたり、父親の子育ての相談相手となる状況は、母親に比べて少ない様子が見えてきた。男性は、進学や就職などの機会に親元を離れる選択をする人が女性に比べて多く、子育ての時期に祖父母の住まいとの距離が遠い人も少なくないと考えられる。また、女性の場合、結婚や出産を経て以降も親と親密な関係を続ける人が多いのに比べて、男性ではそうしたコミュニケーションの面においても、親との関係が希薄なのかもしれない。このように考えれば、父親にとっての子育て支援者を考える場合には、配偶者や祖父母以外の支援者の存在が、母親以上に重要な場合もあるのではないだろうか。

(2) 祖父母にとっての孫育ての意味

今回の調査であらためて確認されたのは、孫の世話を引き受けたり、子育ての相談相手として、祖父母の多くが多様な形で娘や息子を支援している実態であった。しかしながら、冒頭に述べたように、老後における子や孫との望ましいつき合い方をめぐる祖父母世代の価値観は時代とともに大きく変化しつつある。今回の調査でも、「子育ては、祖父母を頼らず親自身で行うべきだ」という考え方にそう思うと答えた人は、実際に孫の世話をした経験をもつ祖父母においても8割近くを占めていた。

ただし、孫の世話をした経験をもつ祖父母では「孫の世話は大変だが、娘や息子のためには引き受けるべきだ」という考え方にそう思うと答えた人も8割前後を占めていた。両者を合わせると、祖父母の6割近くは、孫の親が祖父母に子育てを頼ることと祖父母が孫の世話を引き受けることをめぐって、本来なら親自身で行うべきだと考えながらも、一方では娘や息子のためには引き受けるべきだとする、ある種の複雑な意識を抱いていると考えられる。

これらの結果からは、孫の親が子育てを祖父母に頼ったり、祖父母が孫の世話を引き受ける場合に、祖父母が前述のような複雑な思いを抱く可能性があることを示唆している。たとえば、祖父母に孫の世話より優先したいと考えている老後のライフデザインがあったり、生活費を増やすために働き続ける必要がある場合には、孫の世話を引き受けることを祖父母が負担に感じるケースもありうるだろう。

このようななか、若い祖父母では孫の親が子育てを祖父母に頼ることと、祖父母が孫の世話を引き受けることの双方を許容する考えをもつ人が年配の祖父母に比べて多い傾向がみられた。ここには娘や息子のためであれば、ときには孫の世話も引き受けて、成長する孫との交流を積極的に楽しんでいきたいとする思いも含まれているのではないだろうか。

(研究開発室 きたむら あきこ)

【参考文献】

- ・北村安樹子, 2015, 「孫の教育・将来に対する祖父母の意識—孫がいる55~74歳男女へのアンケート調査より—」『Life Design Report』(Winter 2015.1) : 21-32.
- ・北村安樹子, 2014, 「祖父母による育児支援の行方」『Life Design Report』(Autumn 2014.10) : 70-74.
- ・北村安樹子, 2008, 「子育て世代のワークライフバランスと祖父母力—祖父母による子育て支援の実態と祖父母の意識」『Life Design Report』(2008.5-6) : 16-27.
- ・内閣府, 2011, 「高齢者の生活と意識 第7回国際比較調査」.